

アイドルマスターPLUS銀河の妖精

ヴェルミナティー

目次

プロローグ	1
シエリルと奈緒	5
シエリルとマム　そしてオーデイション	10
シエリルと凜と加蓮	17
シエリルとファーストライブ　その1	26
シエリルとファーストライブ　その2	33
シエリルと加蓮	38

二年前のあの日

それは、私が故郷のイングランドから、ホームステイで日本を訪れてから3週間程経った頃

「アイドルに興味はありませんか？」

「ハイ？」

街を歩いていたら、突然三白眼の大男にスカウトされた

「アイドルに、興味はありませんか？」

言葉が通じて無いとでもおもったのかしら？

今度はゆつくりと尋ねてくる

「大丈夫よ。言葉は通じてるわ」

ホツとした様子の彼

「失礼。私はこういうものです」

差し出された名刺には、346プロ、アイドル事業部、武内プロ
デューサーとある

346プロか、ここってたしかにあの子の…

「あの、どうでしょうか？」

もう一度彼の目を見る

正直、私は自分の容姿に自信を持つてる

ストロベリーブロンドの髪にも

プロポーションにもね

前々からスカウトだって何度もされてる

下心丸出しのね

でも、見た所彼からはそんな感じはしない

上手く隠してるのかしら？

それなら

「ねえ」

私は胸を寄せる様に腕を組み、彼の目をジツと見て問いかける

「どうして私をスカウトしたの？私の何処に魅力を感じたのかしら？」

「笑顔です」

「ハ？」

目線を合わせたまま、間髪入れずに答えてきた
一応断っておくけど、彼に一度として笑顔を見せてない
適当なことを言っているのかと、私は彼の目を睨みつける
でも

「笑顔です」

ふーん

彼は目を逸らさない。真っ直ぐこつちを見る
並みの男なら慌てて目を逸らしたり
踵を返すところだけど

面白いじゃない

「いいわ。その話、受けてあげる」

私がそう言うのと彼が驚いた顔を見せる

「本当ですか！」

「ええ、私に二言はないわ」

彼は相変わらず固い表情のまま、でも嬉しそうに色々な説明をする
オーデイションは受けなきゃダメか

「あっ」

ん？何かしら？

「申し訳ございません、お名前を伺ってなかったですね」

ああ、成る程

「そうね、忘れてたわ」

そして私は、彼に名乗る

私の名前は

「私はシエリル、シエリル・ノームよ!!!」

それが、私の新しい日々の始まりだった

シエリルと奈緒

ハアイみんな！

シエリル・ノームよ！

アイドルにスカウトされて、それを受けた後

とりあえず後日連絡をくれるって言うから今日は帰ることにしたわ

で、ここが私のホームステイ先

インターフォンを鳴らすと

『はい』

「ただいま、帰ったわ」

『おう。今開ける』

それから直ぐに扉を開けてくれたのは

「おつす、シエリル。おかえりー」

「ただいま。奈緒」

私の友達【神谷 奈緒】よ

奈緒のパパと私のダッドはアニメ好きと言うことで知り合ったらしいわ

なんでもダッドがまだ若いときに日本で偶々知り合って、アニメの話で盛り上がってそのまま親友になったとか

ジャパニメーション恐るべしね

「シエリル、どうした？考え事か？」

因みに、奈緒にもバッチリ遺伝してて

「いいえ、大丈夫よ奈緒。ちよっと始めて会ったときの事をね」

「シエリル・ノームです。よろしくお願いします」

3週間前、私が神谷家のお世話になる日

えっ？私が敬語使ってる？

私だってお家に住まわせて貰うんだもの。それくらいするわ

「まあ、綺麗な子ねえ」

「シエリルさん、どうか自分の家だと思ってくつろいでくださいね」

奈緒のママもパパもそう声を掛けてくれたわ
本当に優しいご両親よ

でっ、肝心の奈緒は

「…」ガチガチ

ガチガチに緊張してた

私が目を見つけると…

「びくっ！」ビクッ

ビクッとした、と言うか自分で言ったわね

「シエリル・ノームよ、シエリルでいいわ。よろしくね」

「なっ、あつ、ええーと。奈緒、神谷 奈緒、だ。じゃない、です」

ふふっなんだか可愛い

「奈緒ね。敬語なんていらないわ」

「あつ、ああ」

その日の奈緒はずーっと緊張しっぱなしだった

「なっ、なんだよ！何思い出してんだよお！」

うん、相変わらず可愛いわ

「別にいいでしょ？あれから直ぐに仲良くなれたんだから」

「それは…そうだけど」

「奈緒、ママが呼んでるわよ。ご飯できたって」

あれから3日後

奈緒のママから頼まれて奈緒を呼びに来た

ノックしても返事が無いからドアを開けたんだけど

「」

ベッドの上で、奈緒がイヤホンをつけて音楽を聴いてる

目を閉じて、気持ち良さげに歌詞を口ずさんで

「奈緒」

奈緒のほっぺたをツンとついでみる

直後目を見開き、全力で後退する奈緒

「な、な、な、なんだよー！」

慌てふためく奈緒

「ママが呼んでるわよ。ところで奈緒、何を聴いていたの？」

尋ねる私に顔を赤くし何でもいいだろ、と呟く奈緒

ふーん

「ちよつと貸して」

「なあっ！やめろー！」

イヤホンをヒョイつと奈緒の手から取って彼女の聴いてた曲を聴く

これは、確か

「Scarlet Ballet」？」

あたふたしてた奈緒が驚いた顔を見せる

「ふえ？知ってるの…か…？」

「ええ、聴いたことあるわ」

丁度サビに差し掛かるところでわたしは

「〜☒」

軽く歌ってみる

うん、結構好きな曲よ

ダッドが前に歌ってて知ってたの

「ほあ…」

奈緒の方を向いてみたら真つ赤な顔のまま惚けていた

「どうしたの？」

「どっ、どうしたじゃねーよー！」

私に問いかけられてそう言いだす奈緒

本当どうしたのかしら？

「なっ、なに歌ってんだよ！はずかしくねえーのかよ！」

「？別にはずかしくなんて無いわ。いい歌じゃない」

私が聴いてて覚えてたくらいだからね

「やっ、でもそれ、アニソンだし」

だから？

「はっ、恥ずかしいだろ！オタクっぽくて…」

ふーん

「馬鹿ね」

私はビシツと言ってやった

「なっ!」

驚いた顔の奈緒に畳み掛ける

「あなた、この歌が好きなんですよ?だから夢中で聴いてたんじゃないの?」

「それは...」

「好きでなにか悪いの?誰かに迷惑をかけてるわけでもないですよ。自分の好きを否定するなんて、この私が、シエリル・ノームが許さないわ」

全力で宣言する

「お前ってやつは...」

小さく呟く奈緒

「それに、ダッドたちがアニメ好きだったおかげで、私達は知り合えたのよ」

ほんとのことよ。二人が知りあわなければ、こうして私達も知り合うことなんてなかったもの

「お前ってやつは」

もう一度同じ事を言う奈緒。でもその顔は少し笑ってる

「シエリルちゃん、なおー。ご飯よー」

いけない!呼びに来てた事忘れてた

「はーい!行こうぜ、シエリル!」

えっ?

「ふふっ。行きましょう、奈緒!」

「なああああ!回想終わり!」

あら、せつかく良いところだったのに

「もう!何だよもう!」

随分照れてるわね

「私と奈緒の大切な思い出よ?」

「うわっ、臆面なくそんな事言っ!からかうなよ!」

「ほんとのことよ」

嘘じゃないわ。日本に来て最初の友達との思い出なんだから

「そりゃ、あたしにとっても大切な思い出だけど…」

「ん？」

「だあー！ほらっ、手洗いうがいしてこい！夕飯はエビフライだぞ！」

「ふふっ、はい」

ちやーんと聞こえてたけどね

そのまま洗面所に行こうとしたところで

「あっ。そうだ奈緒」

思い出して口を開く

「なんだよ？」

「私も、アイドルになることにしたわ」

「はあああああああ!？」

シエリルとママ　そしてオーデイション

シエリルはすごいよ

すごい自信満々で、物怖じしない態度で、本当にカッコいいでも、笑った顔は滅茶苦茶可愛くて

てか、なんだよあの綺麗な金髪！なんだよあのナイスバディ！アニメから飛び出して来たかと思ったわ！

そんなシエリルが…

なんだよ…

なんなんだよ…

「アイドルって！なんだよおおおおお!!」

「アイドルって！なんだよおおおおお!!」

うわっ、ビックリした

ハイみんな。シエリル・ノームよ

今、お夕飯を食べているのだけど、急に奈緒が叫びだしたわ

「奈緒、お行儀悪いわよ?」

「あつごめん…じゃない!」

違うなと思うけど?

「アイドルって何だよ!」

ああ。その話?

「アイドルはアイドルよ?と言うより。奈緒もアイドルでしょ?」

そう。彼女も実はアイドルなの

私が日本に来る前にスカウトされたんだって

それも私と同じ346プロにね

「あう。それは…」

「よろしくね、奈緒先輩」

グハアと仰け反る奈緒

どうしたのかしら?

「おまつ、やめろよそーゆーの!」

そう言いながら結構嬉しそうだけど？

「それに、あたしだって、まだ全然一人前なんかじゃないし」

「シングル曲にユニット曲まであるのにな？ 私はまだオーディションを受けなきゃいけないのよ？」

いきなりデビューは、虫が良すぎるものね

「なんだ、オーディション受けるのか。合格前からそんな事…」

「私が落ちると思う？」

「… 思わないです」

当然よね！

しばらく頭を抱えたり、唸ったり

奈緒って見てて飽きないわ

「シエリル！」

奈緒が私を呼ぶ

「負けねえからな!!」

！

高らかと宣言する奈緒

奈緒：… あなたは… 本当に…

「ふふっ」

「なっ、なんだよー！」

本当に… あなたは

「ふふっ、ごめんさい。奈緒のそうゆうところ。好きよ」

「なああああああ!？」

本当にこの子は私の最高の友達よ

あつ、因みにこんなに騒いでたんだけど

奈緒のご両親は…

「シエリルちゃんアイドルだなんて、お赤飯を炊けばよかったかしら」

「こんな展開を我が家で観れるなんて、感動！」

うん、本当に素敵な家族ね

それからしばらくして

「あ、そーだシエリル」

「なにかしら？」

奈緒の部屋で二人してくつろいでたんだけど

「お前、ちゃんとお母さんにアイドルになるって伝えたか？」

・・・

「oh...」

しまった...

勿論ママの事は大好きよ。優しくて、綺麗で、強くて、料理上手で、
でもね...

自室に戻り、愛用の携帯の前でかれこれ30分。わかってるわ、必要な事だつてゆうのは。こうなったら...

「短期決戦ね」

ホームステイ先でアイドルデビュー！

ママはどう思うかしら？

いいえ、考えてるだけじゃダメよシエリル

覚悟を決めたわ。やってやる、やってやるんだから！

トゥルルル トゥルルル

呼び出し音が鳴るなか、私の鼓動は早まり続ける

大丈夫よ、落ち着きなさい私。私なら出来るわ。

だって私は...

トゥルルル... ピー

『ハロー、シエリル』

きた！

「ハイ！ママ！実は私！日本でアイドルになることにしたの！

それじゃあね！」

いける！

しかし

『シエリル』

...

『お話し、しましゅう?』

「YES、ママ」

ママは、怒ると本当に怖いの...

『なるほどね...』

ママに今日の出来事をちゃんと話したわ

暫く無言のママ

この沈黙が怖い... すると

『シエリル』

ママが再び私の名を呼ぶ

そして

『覚悟は、ある?』

っ!!

ママが続けてくる

『私にはアイドルがどんなものかよくわからないわ。でもね、お仕事
だって事はわかる。プロになるのがどういいう事か理解はできてるの
?』

... マムの言う事はもつともよ。

アイドルが楽な仕事じゃないなんて、奈緒を、あの子達を見てたら
わかるわ。

でも、だからこそ私は

「当然よ!」

そう返した

「ママ、私を忘れたわけじゃないでしょ? 私はシエリル。私が自分で
決めた事に妥協なんて許すと思つて?」

そう、私がやりたいと言つたのだ

この私が半端な覚悟で物事を決めるわけないわ
やるならば徹底的よ!!

また沈黙が流れる

それを先に破ったのは…

『ふう…』

ママだった

『わかったわ、シエリル。どうやら本気みたいね。』

「ママ！」

思わず声をあげちゃった

『あなたが自分でやりたい事を見つけたのなら、私が文句を言うことなんてないわ』

「ありがとう、ママ」

『当然よ、私はあなたのお母さんなんですもの。娘の応援をしない母親なんていないわ』

ママ…

『辛いことがあつたら相談なさい。私はどんなに離れてても、あなたを応援するわ』

「うん、本当にありがとう」

ママは本当に最高のママね

『パパには私から伝えるわね。安心して』

「反対したら締めるから』

ホント最高に怖いわママ

でも

「ありがとう。愛してるわ、ママ」

『私も愛してるわ、シエリル。おやすみなさい』

「うん、おやすみなさい」

「ふう」

シエリルからの電話を切つてから、私は再び息を漏らす
全く、あの子は誰に似たんだか

あの行動力、やると決めたら絶対曲げない根性

フフツ、間違いなく私の娘ね

娘はいずれ親離れをすると、覚悟してたけど

やっぱり寂しいものね

私でこれじゃあ、パパなんてどうなることやら

「グレイスー。今の電話、もしかしてシエリルからかー？」
噂をすれば

「ハーン、今行きます」

さて、これから忙しくなるわよ！

まず、パパを説得締めるところからね

数日後

「いよいよよね…」

私は今、346フロの前に来ている。

先日、やっとプロデューサーから連絡があった

この私をこんなに待たせるなんてね

まあいいわ

「よしー」

気合を入れて進み出す

受付で入館証を貰い、エレベーターで目的の階へ

ええーと、目的の部屋は

「シエリル・ノームさん？」

と、一人の女性が声を掛けてくれた

黄緑色のスーツを着た優しそうな人

事務員の人かしら？

「はい」

「お待ちしてました。こちらへどうぞ」

笑顔で対応してくれる事務員さん

その案内でオーディション会場の会議室に

「こちらです。頑張ってくださいね」

「ありがとうございます」

事務員さんに笑顔で会釈して別れる

自分でも少し緊張してるのがわかる

でも、

「すー、はー。よしー!」

深呼吸と共に気合を入れ直し
トントントントン

「失礼しますー!」

会議室の扉をノックする

「お入りください」

中から声が聞こえる。あの声は彼ね

お手本通りの動作で入室する

練習は奈緒たちに付き合ってもらった

イスの横に立ち、審査員たちを見やる

武内プロデューサーと、冴えないおじさんの二人

「自己紹介と、志望動機をお願いします」

プロデューサーの声に私は答える

「はい…:」

高らかにね

「シェリル・ノームよ! トップアイドルになりに来たわ!!」

シエリルと凜と加蓮

「武内君。彼女は、凄まじい逸材だね」

今西部長が窓の外を眺めながら、私にそう告げる

「はい。ですが、私の予想を遥かに超えていました」

彼女：「シエリル・ノーム」さんには、目にした瞬間から、只者では無いものを感じていた。しかし

「彼女は波乱を呼ぶよ」

再び口を開く部長

そして私の方を向いて

「武内君。彼女の事は、君に一任するよ」

「よろしいのですか？」

願っても無い事を… 彼女の素質なら、上も放っておかないだろうに

「いや、寧ろ恐れ多くてみんな君に丸投げするだろうね。」

責任取れ、と」

「ハア…」

思わず納得してしまった…

ハアイみんな！

シエリルよ！

え？オーデイションの結果？わざわざ言わなくてもわかるでしょ！

もちろん、ゴ・ウ・カ・クよ！

当然よね！だって私は…

「ノーム！今のステップ、遅れてるぞ！」
いけない！

「はいー！」

今、私はダンスレッスンの最中。ダメね、ちゃんと集中しないと。ひとつひとつの積み重ねが力になるんですもの

トップアイドルになるなら、手を抜くなんて許されないわ！

「さっきのところからだ、いくぞー！」

トレーナーさんの声が響く

「お願いしますー！」

さあ、いくわよー！

「よし、今日はここまでだ」

「ありがとうございます」

本日のレッスンを終了を告げるトレーナーさん

以前一回、体力がある限りやりたいとお願いしたら怒られたの

「無理を繰り返すより、継続的を繰り返せ」ってね

何よりまだ本格デビュー前。そう、デビュー前なのよね…

「ふう…」

シャワールームで汗を流し、外に出たところでつい息を漏らす

ダメね、こんな事考えてたら。

自分に自信が無いわけじゃないわ。でもこれはみんなが歩む道のり

なさけない事なんて言えないわ

「よしー！」

気合を入れて歩き出そうとしたところで

「あつ。おつすシエリル」

「あら、奈緒」

私に声を掛けてきたのは親友の奈緒と…

「やつほー、シエリルおつかれー」

「お疲れ、シエリル」

「ハアイ、加蓮、凜。お疲れ様」

奈緒と同じユニット【トライアドプリムス】のメンバー。

【北条 加蓮】と【渋谷 凜】の二人よ

この二人とは実はアイドルにスカウトされる前から知り合ってるの

二人が奈緒の家に遊びに来た時に、ね

「うわっ…」

「おおー、綺麗な子」カシャ

これが二人の初対面の反応、凜は素直に驚いてくれて、加蓮はいきなり写真をパシャリ。どうも趣味みたい

その後二人とはすぐに仲良くなれたわ。主に奈緒関連の話題でね
それから、一緒に遊んだり、前のオーデイションの練習にも付き合ってくれたりして。

今では大切な友達よ

「シエリルってすごいよねー」

加蓮がそんな事を言ってきた

ここは近くのファーストフード店。あれから三人に誘われてやって来たの

日本に来た当初は、余りこういうお店は健康に良くないなんて思ってたけど

ここのハンバーガーって美味しいのよね。モグモグ
って加蓮はどうしたのかしら？

「私の何が凄いの？」

私が聞き返すと

「いやー、例えばさ。体力オーバーブーストの茜ちゃんより早くに基礎トレーニング課題をクリアするとか」

茜ちゃんって云うのは、【日野 茜】ちゃんのこと。

元気いっぱいのかわいい子よ

「ボイストレーニングも凄かったらしいね。美嘉が燃えてたよ？負けられないって」

続けて凜もそんな事を言う。美嘉は【城ヶ崎 美嘉】の事。初めて会った時から親切な気の良い先輩よ

「ふうん、そうなんだ。まあ私にかかれば…」

「ふふん、だろだろ？シエリルはすごいんだぞ」

先ほどまで子供向けセットのおまけフィギュアを眺めてた奈緒がそんな事を言う、ってあら？

「どうして奈緒が自慢げなのよ」

ナマイキ

こうしてあげるわ!

奈緒の頬つぺたを軽く引つ張ってみる。うわっモチモチ

「ふひゃあ、やめおー! ひっはうなあー!」

「あはは! 奈緒のレアショットもくらい!」 カシヤ

「やめおー、とるふあー!」

「私も...」 カシヤ

「!?」

奈緒のいじられキャラ具合は私も勝てないわ

流石ね、奈緒

「ううー、なんか嬉しく無い事考えてないか?」

「気のせいよ」

「だけど...」

うん? 凜?

「負けられない、ね」

「ふふん。どうかーん」

凜、加蓮...

ふっ

「全力で、かかって来なさい!」

私、凜、加蓮の後ろでカミナリが鳴った気がする(あくまでイメー
ジ)

「って、そのセリフお前じゃねーだろ!」

奈緒のツツコミが決まってみんなで笑い出す

ふふふ、仲のいい友達が増えて良かった

それから暫くして

「ごめーん。ちよつとお手洗い。奈緒も行こ?」

お店を出て歩いていたら、加蓮がそう言いだした

「え? あたしは別に...」

「いいからいいから」

加蓮が強引に奈緒を連れて行く

あら？加蓮が今、ごめんねって顔をしたような…？

この場に残ったのは私と凜の二人

…加蓮ったら、何を？

すると

「あのき…シエリル…」

凜が口を開く、いつもクールな子だけど、妙に歯切れが悪いわね

「なにかしら？凜」

私が聞き返しても、何かを言いたそうな、言いづらそうな

でも、意を決したように

「シエリルは、その、プロデューサーにスカウトされたんだよね」

プロデューサー？ああ武内プロデューサーの事かな？

「ええ、そうよ？それが？」

いや、もしかしてこれは

「その、あいつのこと、どう思ってるかなって…」

なるほど、そう言う事か

そういえば、凜をスカウトしたのも彼なのよね

さて、なんて答えるべきかしら

「うーん、確かに感謝してはいるわ。彼にスカウトされたおかげで、こうしてアイドルになった訳だから」

「そっ、そうなんだ」

ふふっ、凜ったら

「彼っていつも堅いのよね、もう少し気楽でもいいと思うけど」

「そうだね、それは思う」

同意してくる凜

「だけど、それだけ真面目って事なのよね。アイドルの事をよく考えて、自分に出来る精一杯で頑張ってくれている。

ほんと、感謝しても仕切れないわ。」

「私もそう思う。あいつ、不器用なのに頑張ってくれて、私に道を照らしてくれて。多分、プロデューサーが居なかったら、私なにもなれなかったかもしれない」

へえ。でもそれだけじゃないはずよね？

「彼って、結構カッコいいわよね」

「へっ？」

私がそう言うと、あからさまに動揺する凜

「さつきも言ったけど、不器用なりに真面目で、一人一人を理解しようとしてくれて。狙ってる子とかいるのかしら？もし誰もいないなら…。」

「ダメ！」

聞いたことのない大声で叫ぶ凜。周りに人が少なくて良かった

「ダメだよ、そんなの…。」

顔を紅くして、そう呟く凜

全くこの子は

「ごめんなさい。でもね凜、わかってるわ。彼の事、好きなんですよ？」

「なっ!？」

そんなあからさまな態度で隠してるつもり？

「やつ、そんな事、ないよ…。」

「凜」

彼女に顔を近づけ、その目を見つめる

「本当は？」

「…っ！」

間髪入れず目を逸らし、小さく頷く凜

ふふん。私に隠し事なんて、2059年早いわ！

「ふうん、そっか」

「…。」(頬っぺた真っ赤)

可愛いわね、ホント

「加蓮も協力者？」

小さく頷く凜

だと思った

「最近、プロデューサー。シエリルの事で忙しそうで…。わかってる、シエリルは凄いいし、そのデビューに力を入れて当然なのは。だけ

ど…」

なるほど

「ヤキモチ妬いちゃった？」

「うん…」

彼の所為じゃないわね

それどころか、私の…

「ごめん、シエリル。シエリルは悪くないのに…」

っ！

ホント、クールに見えて、優しい子なんだから

好きな人、か…

「凜。彼に好きって伝えないの？」

再び顔を紅くして驚いた顔を浮かべる凜

「できないよ。私はアイドルで、あいつはプロデューサーで」

確かに、普通はね。だけど

「素直になれなくて、本当の気持ちを伝えられなかったら。チャンスはいくらでもあるはずなのに、それが出来なかったら。きつと後悔するわ。もしかしたら、突然そのチャンスが無くなるかもしれない。どんなに手を伸ばしても、伝えられなくなるかもしれない…」

不思議ね、自然とそんな事を言ってたわ

「シエリル…？」

「ふふっ。だからね凜。せめて、後悔だけは無いようにしなさい。アイドルだからって、あなたの人生は一度だけ。その人生を決められるのは、誰でも無い、凜だけなんだから」

一度も恋をした事無いはずなのに、随分偉そうな事言ってるわね、私

だけど、これは私の本心

「うん、ありがとう。シエリル」

少し考え込むようにしてから、そう言ってくれる凜

そして

「頑張ってみる」

私に笑顔を向けてくれて

もう、ホント、もう…

「凜！」

「この子はもう！」

「カワイイんだから！」

全力で凜に抱きつく

「ちよ、なにし、シエリル… やめっ！きやつ、どこさわって」

「おーい、お待たせー。いやー、加蓮が急にあのアクセ可愛いって…

お前らなにしてんだー!？」

「おうっ、これはよそー外」

あつ奈緒達が帰ってきたわ

「おかえり」（凜は抱き締めたまま）

「ちよ、お前らなにしてんの!?!あたしらがいない間にどんな物語が進
行したよ!?!」

「照れてるしぶわんことデレデレシエリル、これは激レアですな〜」カ
シャ

「撮ってる場合じゃねーだろ！」

奈緒のツツコミ、冴え渡ってるわね

加蓮も相変わらずだし

「シエリ… ル、くる… し…」

「うわあああ！シエリル！凜を離せ！」

「シエリル〜、凜の抱き心地はどう？」

加蓮ったら、そんなの…

「パーフェクトよ！」

当然！

「なんの話だよー！もう！あたししかツツコミはいないのかああああ
!?!」

あれから凜、加蓮と別れて奈緒と一緒に帰宅の途中

「ねえ、奈緒？」

「ん？なんだよ？」

私はつい奈緒に尋ねてしまった

「恋って、なんなのかしら？」

「ぶっ！な、なに聞いてくんだよ!？」

凜と話していつい気になってしまったの

恋ってなんなのかしらって

「な、なんだよ。お前、その、恋…してるのか？」

「なんでそうなるの？」

恋について気になったただけなのに、どうして私が恋してるって思ったのかしら？

「なんだ、びっくりした」

奈緒が安心したように呟く、そして

「恋なんて、人それぞれだろ。どーゆーものかなんて、してみたらいつかわかるよ」

なるほど

「確かにね、奈緒ってそうゆう所はクールね」

「ん？褒められてないよな？」

おっと、気づかれちゃった？

「ふふっ、お先にー!」

私は奈緒を置いて駆け出した

「なあー！までシエリルー!!」

恋なんて、よくわからないわ。でも、もし恋をするなら。

やっぱり、銀河で一番の恋がしたいわね！

それから数日後の事よ

プロデューサーがレッスン中の私の元にやってきたのは

「ノームさん。デビューシングル、並びにファーストライブが決まりました。」

シエリルとファーストライブ その1

ハアイ、みんな

シエリルよ

プロデューサーからファーストライブの告知を受けてから二ヶ月
遂にその日が来たわ。

会場はショッピングモールの小ステージで、今は楽屋代わりに用意
してもらった会議室でスタンバイ中よ。

緊張？この私がする訳無いじゃない。

「…」

する訳ないじゃない…

トントン

ビクッ！

だ、誰かしら？落ち着きなさいシエリル。

「ハ、ハイ。どうぞ」

微妙にぎこちなく答えちゃった。

でも入ってきてくれたのは。

「よっ。シエリル」

「プロデューサーがここに居るって」

「おう、ステージ衣装かわいいく」カシヤ

ふふふ

「ハアイ、奈緒、凜、加蓮。来てくれてありがとう」

私の大切な親友たちだった。

「どうよ、緊張してるか？」

奈緒がそう尋ねてくる。少しいたずらっぽく、でも心配してくれて
るのがわかるわ。

「ええ。ほんの少しね」

みんなの顔を見てたら本当のことを言ってしまった。私らしくな
いかしらね。

「おー、シエリルのレアな本音だー」

加蓮がそんなことを言い出す。正直否定できないわね。だけど…

「ほんの少しって言ったわよ？それに今は大丈夫。あなた達が来てくれたんだから」

これも本音。3人の顔を見た途端に心から安心出来た。

「へへっ。なら安心だな」

奈緒が笑いながら呟く。凜と加蓮も笑顔を見せてくれた。

つられてみんな笑い出す。

「なんだか懐かしいな。こういうステージ」

暫くして、3人と一緒に舞台袖まで来た時、不意に凜がそう言った。

「懐かしいって?」

私がそう問いかけると

「うん。私のデビューライブの舞台もこんな感じの小さいところだったから」

凜が言うデビューライブとはトライアドプリムスのことではなく【ニューージェネレーション】のことね。

明るく賑やかな【本田 未央】と優しく笑顔の可愛らしい【島村 卯月】ちゃん。

二人は今はそれぞれ別のユニットだけど凜と今でも普通に仲の良い子達よ。

それはそうと、私達はライブの会場に目を向ける。そこは凜の言う通りとても大きいとは言えない会場ね

「でもー。なんでこの前のライブでデビューじゃなかったのかな？私たちの時みたいにさー」

加蓮がそんなことを言う

この前のライブとは一ヶ月前の「オールスターライトライブ」って言う346プロのアイドル総出演のライブだったんだけど…

「まあ、デビュー曲の準備もいろいろあつた訳だから仕方ないんじゃないや

ないか？」

奈緒の言う通り、そもそもまだ持ち歌があるわけでもなくって、それどころかステージに立ったこともないのだからプロデューサーが気を遣ったのかもしれないわね。

「まあ、シエリルって図太いからビビったりしなさそうだけどな」

「あら？どーゆーことかしら？」

余計なことを言う奈緒にデコピンを放っておく。

「あうう・・・」と唸る奈緒は放っておいて、私は改めてステージに目をやる。ここが私のスタートライン。

「ふふっ」

思わず笑みがこぼれる

「どんな場所でも関係ないわ。ステージがあつて、お客さんがいる。ならば全力で魅せるだけよ！」

ママとも約束したんだもの。

私は全力でアイドルをするってね

「やっぱりすごいね。シエリル」

微笑みながらそう呟く凛に私は

「当然よ。私はシエリル。シエリル・ノームよ！」

そう言い切った

あとで聞いた話だけど。凛たちニュージエネレーションはファイストライブの時いろいろトラブルがあつたらしいわ。

でもそんな過去のことよね。だって、凛も未央も卯月ちゃんも今でも素敵なアイドルなんだから。

3人と別れプロデューサーやスタッフさん達と最終チェックをする

曲を流すタイミングなんかは私の我が儘を聞いてもらう事になったけど、何人かのスタッフさんが私のサインを求めてそれで引き受けて貰えたわ

ところでなんだかプロデューサーの様子がおかしいけど？

「プロデューサー。どうかしたの？」

プロデューサーに声を掛けてみる

「あつ。いえ、その…」

どこかバツの悪そうなプロデューサー。

「何かあったのかしら？」

私がそう聞くといつもの癖、首の後ろに手を当てながら

そして意を決したように

「申し訳ありません」

「ハ？」

そんな事を言ってきた

プロデューサー曰く、私のデビューは本来、一ヶ月前の大規模ライブで行う予定だったそうだけど。

「反対された？」

「…はい」

他のアイドルの部署が待ったをかけたらしいわ

私によってお客さんファンがどんな反応をするか。もしも自分たちのアイドルより人気が出たら…

なるほど、私だからか。誇るべきなのかしらね。

だけど…

「バカね」

ついそんな事を言ってしまった。プロデューサーもギョツとしてるわね

私は畳み掛ける

「私は奈緒たちからよく言われるけど、自分に自信を持っているわ。でもね、それはみんなアイドル達だって同じ。レッスンを頑張ってきて、何度もライブを行って…」

その人達は自分たちのアイドルを信頼出来てないだけよ」

奈緒、凜、加蓮の3人も、美嘉も茜ちゃんも普段はあわあわしてる

【小日向 美穂】ちゃんも私のファーストライブを応援してくれて、でも自分たちに自信を持っていた。

彼女達が積み上げて来たものはそう簡単に揺るがないと感じたわ。心から尊敬している。

「それとね、プロデューサー」

「はい」

彼の目をしっかりと見て言葉を続ける。

「あなたには感謝してるわ。こうして私をアイドルデビューさせてくれたんだもの。場所なんて関係ないわ。だって私はシェリル、どんなところでも全力で輝いて魅せるわ。」

「ノームさん…」

ちらつとステージの外に目を見やる。確かにお客さんの数はあのライブよりはるかに少ないわね。まあ、くらべることがおかしいんだけど。

「だけど」

「少しでも人がいる。いいえ、たとえゼロでも私は歌うわ。私自身の力でファンの心を掴んでみせる！」

私の宣言に気圧されるプロデューサー

彼に向かって

「だからもう一度言うわ。ありがとう、プロデューサー」

私の言葉に驚いたような顔を浮かべるプロデューサーは

「はいっ！」

笑顔でそう答えた

「…あなた、笑えたのね？」

「えっ？」

彼女には驚かされる。

舞台袖でのノームさんとの会話の中で私はふとそんなことを思っていた。

とても今回がファーストライブだとは思えないあの自信。

アイドルに対する意識の高さ。

私の方が圧倒されっぱなしだ。

「ノームさん。そろそろ時間です」

「ええ。わかったわ」

ライブ開始まであと少し。

私の心は昂ぶっている。

彼女がどんなステージを見せてくれるのか。

開始時刻となりノームさんに静かに合図を出す。

いよいよ始まるファーストライブ。

ノームさんはゆっくり舞台に歩いていく。

そう言えばノームさんはスタッフに何かお願いをしていたような？

そんなことを考えた矢先…

『あたしの歌をきけえええええええ！』

とんでもない叫びが響き渡った。

『あたしの歌をきけえええええええ！』

「なあああああー！」

シエリルの奴がいきなりブチかました。

あたしも隣の凜も加蓮もマジでびっくりしてる。

あたり前だけどお客さん達もだ。

シエリルの叫びとともに始まる音楽。

何が起ころのかと期待させてくれるハイテンションなサウンド。

あいつの練習で何度か聴いてるはずのあたしでさえワクワクするんだ。

聴いたことない人達はグイグイ惹きつけられるに決まってる。

そして始まるシエリルのデビュー曲

【射手座★午後九時★Don't be late】

「!!」

上手い…

繰り返し返すけど、あたし達は何度かあいつの練習でその歌を聴いてた

はずなのに、なのに…

「すごい…」

凜がそう呟く。

そう表現するしかない。それぐらいすごいんだ。

響き渡る声が、その踊りが、何よりシエリル自身がすごくて！

「あっ！」

サビに入る頃にはいつの間にか多くのお客さんが増えていた。

多分あの叫びが気になった人達だろうけど、みんなが引き込まれて

いた。

そして

『〜』

曲が終わると同時に

「ワアアアアアアア!!!」

割れんばかりの大歓声が鳴り響いた。

シエリルとファーストライブ その2

『ハイ、みんな！シエリル・ノームよ！』

シエリルのMCが始まった。

堂々としてるその姿に観客はみんな集中している。

もちろんあたし達もだ。

『今日は私のファーストライブに来てくれてありがとう！』

私のデビューソング【射手座★午後九時Don't believe I can do it】
e】どうだったかしら？』

サイコー！

よかったよー！

そんな声が観客達から返される。

そこには最初のインパクトだけじゃない。

あいつの歌声の魅力に魅せられた素直な思いを感じざるを得なかった。

『ありがとう、みんな！』

シエリルがとびっきりの笑顔を見せる。

あの笑顔にはあたしもやられたな。

するとシエリルがちらりと舞台袖を見る、何かの合図を送ったみたいだけど？

『みんな、もう一曲、付き合ってくれるかしら？』

ざわめく会場、隣の凜も加蓮も、もちろんあたしも二曲目があるなんて事は知らされてない。

驚いた顔を浮かべてたあたしをシエリルがちらりと見てドヤ顔をする。

あいつう。

観客達の目は期待に満ちている。

満足げに頷くシエリル。

『ありがとう。それじゃあ、聞いてちょうだい。』

【ダイアモンドクレバス】

スピーカーから流れてくるのは静かな、優しい音色。
先程とは真逆の曲調にみんな驚きを隠せない、だけど…

『!!』

会場に響きわたるシエリルの歌声。

それはあたしの心をいきなり掴んだ。

それは、あまりにも綺麗な、儂げな、優しい歌声。

観客達も一気に引き込まれた。

なんだよこれ、なんなんだよ。

胸が締め付けられるような、そんな気さえする。

普段のあいつを知るあたしでさえ、

いや、あたしだからかな？

ふと、隣の加蓮の顔を見る。

「……………」

加蓮の目からは涙が流れてた。

おいおい、なんだよそれ。

曲が、進むにつれて、あたしの目も潤んでくる。

そして、

サビに入ったその瞬間、

『』

優しい音色が響く中奏でられる、力強く厳かな、もはや神聖ささえ
感じる歌声。

ああ、シエリルはやつぱりすげえよ。

認めざるを得ない、あいつの凄さを。

ステージの上で歌うその姿は、まるで… まるで…

「……………妖精」

ファーストライブは大成功、なのかしらね？

全ての曲を歌い終え、みんなの大歓声を受けてライブは終了した。
何人かの人は、泣いてたわね。

正直、嬉しかった。

私の歌が、みんなに届いて。

今私はスタッフさんたちと一緒に片付けを終えて、誰もいないステージの上に立っている。

あと少しで降りなきゃいけないんだけど、だけど。

二曲目についてはもしもの時にと、こっそり練習しておいてよかったわ。

奈緒の驚いた顔も見れたしね。

プロデューサーにも、感謝しないとね。こんな素敵な舞台を用意してくれて。

奈緒達にも、お礼しないと、しないとね…

「シエリル」

私を呼ぶ声に振り向く。

そこに居たのは…

「ハァイ、奈緒。みんな！」

奈緒、凜、加蓮。

お馴染みの3人だ。

「あれあれ？シエリル、泣いてるの？」

加蓮が意地悪そうに聞いてくる、って。

「なっ、泣いてなんかないわ！」

慌てて目元を拭う。

「泣いてるじゃん」

凜にまで指摘される、うう…

「そっ、そんなこと言ったら、3人とも目が赤いわよ！」
うっ、という顔をする3人。

「なっ、泣いて悪いかよ!!」

奈緒が逆ギレした!

「ぶっ、」

奈緒のいつも通りの感じに私は、

「ふふっ」

凜と加蓮も、

「「あはははは!!」」

思いつきり笑いだしちゃった。

「なっ、なんだよ、笑うなよ!笑うなよおおお!!」

「なにはともあれ、お疲れ様。シエリル」

「ありがとう」

奈緒をいじっていつもの感じに戻った私達。ほんと奈緒には感謝ね。

「お前、失礼なこと考えてないか?」

「気のせいよ」

みんなして私のライブのことを褒めてくれた。すごかった、綺麗だったよってね。

そうしたら、奈緒が。

「正直に言うと、マジですごく良かった。本当、どうすりやいいだよって。こんなの勝てねえよってくらいさ。」

「奈緒・・・」

いつもの奈緒らしくない、弱々しい言葉。

ああ、プロデューサーが話してくれた、上に反対されたって言うのはこう言うことなのかなって思っちゃった。

だけど・・・

「だからこそさ。あたし達も、頑張らねえとなってさ。」

・・・え?!

「そうだよね。あんな凄いの魅せられちゃったらさ。」

加蓮・・・

「私たちも、もっと、頑張れるって。」

凜・・・

「だからさ、シエリル！」

奈緒・・・

「ありがとな！サイコーのライブだったぜ!!」

・・・

私は3人を思いっきり抱きしめる。

「わっ」「なっ」「おうっ」

「ありがとう。大好きよ!!」

こうして、私のファーストライブは大成功に終わった。

私はこの日のことを決して忘れない。

アイドルとしてのスタートラインたるこの日を、

親友達との絆を確認できたこの日のことを・・・

シエリルと加蓮

ハアイみんな、シエリルよ！

ファーストライブからしばらく経ったわ。

あのライブの成功をキツカケに私、結構注目されてるみたい。

当然！・・・なんて言うわけにはいかないわよね。

あくまでスタートを切っただけ。もっともっと、頑張らないとね！

「奈々ちゃん、ご馳走さま。また来るわね。」

ここは【346カフェ】

事務所の施設内にあるカフェなんだけど、レッスン終わりにここに
来るのが最近の私のマイブームなの。

「ありがとうございます！シエリルちゃん！キャハ！」

彼女は【安倍 奈々】ちゃん。

アイドルなんだけど余裕がある時はここの仕事を手伝ってるんで
すって。

なんでもお客さんの笑顔がアイドルとしての自分の力になるから
だとか。

私と同一年の17歳なのに、すごく立派だわ。

私も見習わないとね！

さてさて、今日の予定はもう無いし奈緒は仕事だし。先に帰ろうか
し・・・あら？

「...」

私の足下に黒い子猫が寄って来たわ。こつちをじーつと見てきて
る。首輪があるから誰かの飼い猫かしらね。

それにしても・・・

「かわいい...」

そんな言葉が思わず漏れた。

しようがないじゃ無い、可愛いんだから！

「よーしよし。どうしたのかにゃー？」

しゃがみ込み子猫に呼びかける、恐るおそると言った感じに近い
て来る子猫。

その仕草がいちいち。可愛い。
もう少して撫でられる。

と、その時だった

カシャツとシャッター音が聞こえたのは。

「へっ?」

らしく無い間抜けな声が漏れる。

音のした方を向くとそこには...

「あつ、バレちゃった?」

加蓮がいた。いちやった。いてしまった...

「ツツツツツ!!」

顔が熱くなるのがわかる。おそらく真っ赤になってるわよね。

いいえ、落ち着きなさいシエリル。

まだ、希望は...

「ふふつ、シエリルったら。かわいいにゃー」

...

「北条... 加蓮...」

「あつ、その、怒った?」

見られた。見られたかあ。見られたなら...

「北条... 加蓮ウウウウ!!!」

「きゃああああシエリルが切れたああああ!!」

叫びながら全力疾走で逃げようとする加蓮。

ふふつ、甘いわねえ... 私を誰だと思ってるの?

そう、私は... シエリル。

「待ちなさああああい!!」

絶対逃がさない!!

三十秒後

「ぜえ... はあ... シエリル... はあ... 速すぎ...」

「当然... はあ... 私は... ぜえ... シエリルなんだから...」

案外、あつさり捕まえたわ。

加蓮って意外とスタミナ無いのね。今も息切れ激しいし。まあ私もだけ。

さて、こうしちやいられないわね。

「加蓮… 写真のデータを… 消さない…」

やや凄みながら加蓮に告げる。

流星に恥ずかしいわ。あんなデレデレした姿。いやたしかに、あの子猫は可愛いかったし。だけど私にもプライドがあるし。

そういえばあの子、置いてきぢやったけど誰の猫だったのかしら？

「ええ… はあ… いいでしょ？可愛いかったよ、シエリル」

「そういう問題じゃないわよ…」

あつけらかんとしながら答える加蓮。

だけど、私のイメージの問題というか、なんというか…

「大体… じっくりも奈緒とかに抱きついてるでしょ？」

うっ、それを言われるとなんとも…

「それにみんなにも需要があるし…」

「ちよっと？」

加蓮の漏らした言葉に私は凄む。

「あはは、冗談だよ。冗談。」

笑顔で軽く流す加蓮。

この子は本当に…

「ふあ〜ちよっと休憩〜」

私の目線を受け流すようにベンチの方に向かう加蓮。

本当、掴み所がないというか。

私も彼女の後を追う。

「あー、疲れた〜」

「いや、自業自得でしょ？」

ぐいー、と背伸びをする加蓮。

楽しそうな笑顔を浮かべてるけどそもそも追いかけられるようなことしたのは加蓮だし。で、

「データを消すつもりは？」

「無いよ!」

・・・ハア

「他の人には見せないでね・・・」

「りよーかい」

笑顔で敬礼っぽいポーズをとりながら答える加蓮。

まあ悪用する様な事は無いだろうからこれ以上は追求しないでおくわ。

ところで・・・

「ねえ、加蓮。」

「ん?どうしたの?」

私はこの機会に気になっていた事を聞いてみることにした。

「どうして毎回毎回、写真を撮ってるの?加蓮ってそんなに写真が好きだったかしら?」

割といつも写真を撮っている加蓮に聞いてみたかった質問。

この子のプロフィールには趣味が写真とはなかったはずだけど?

と私が聞いた途端、加蓮の顔色が変わった。

悲しそうな表情を浮かべる加蓮。

ちよ、どうしたのかしら?

「あー、うん。その・・・ね?」

加蓮?

「シエリルには話してなかったよね。あの事は・・・」

あの事?

「私ね、小さい頃は体が弱くてね。ずっと入院生活だったんだ。同世代の子たちと遊ぶこともできずに。病室で過ごしていたの。でね?今は治療のかいあって元気なんだけどさ・・・その・・・副作用っていうかね?私・・・」

時々、記憶が無くなるの・・・」

「!?!」

「だからね。こうやって写真を撮ってるの。大切な事を忘れてしまわない様に。失いたく無いからね・・・」

そんな・・・そんな事・・・

「う、嘘… よね… 加蓮… そんな事って…」
「うん」

…ハア？

「えへへ。嘘だよシエリルなら一発で気付くかなあって思ってたんだけどなあ。奈緒が好きならアニメのキャラの設定がベースだよ。」

ああ、なるほど。いたわね、うん。

そう…

「加蓮…」

「うん？ どううし… いひややややは！
シエリル！ ひっひやらにやいでえ」

私は思いつきり加蓮の頬つぺたをひっぱった。

「うう、痛いー」

「自業自得よ。」

頬つぺたをむにむにとなでる加蓮。

同情はしないわ。

「全く。あんな嘘つくからよ。」

「あははー。ゴメンね？」

小首を傾げながら謝ってくる加蓮。

仕方ないわねえ。

「だけどね。」

何かしら？

「体が弱かったのは、本当なんだよ。」

「えっ？」

薄い笑みを浮かべながら眩く加蓮。

彼女はそのまま話を続ける。

「体が弱かったのも、入院生活が長かったのも本当。一番酷い時で、命の危機があった時もあつたくらいね。」

「そんな…」

「えへへ、嘘みたいだけど、これは本当。あつ、でもでも。今は大丈夫だからね。そりゃあー、体力はシエリルはおるか凜と奈緒以下だよ。」

まあそれでもアイドルとしては問題ないのは知ってるでしょ？」

「それは、そうね。」

実際、加蓮がトライアドプリムスのメンバーに劣っている点なんて感じた事は無い。でもそう言えば… さつきも息切れが激しかったわよね…

「あつ、変なこと気にしてる？大丈夫だよ。むしろさつきのは楽しかったし。」

私の考えを見透かして笑顔を向けてくる加蓮。

「まあそれでね。写真の事だよ。あれは日課かな？」

「日課？」

「そう、私が死にかけた後、お母さんたちがね。思い出を残すために写真を撮りだしたの。当時はカメラでね。私も借りて目に付いた景色をパシャリとね。」

もちろん見ての通り。心配しすぎだったわけで。私はこうして大きくなったし。もう全然大丈夫なんだけど。」

笑顔で語る加蓮。

「だけど、その笑顔は…」

「私、今がすつごく楽しいんだよね。アイドルとして過ごしている日々がね。凜がいて、奈緒がいて。もちろんシエリルがいて。いっぱい友達や仲間ができてさ。」

薄く、儚げな。

「だから。忘れないように。消えてしまわないように、こうして写真を撮り続けてるんだよ。」

…

「…」

「あれっ？シエリル、どうしたの？」

「悲しい事、言わないで…」

「へ？」

加蓮にその気がなくても、私の思い過ぎでも、

「悲しいこと言わないで！」

私は立ち上がりながら大声を出していた。

「シエリル…？」

驚いた表情の加蓮の事を見据えて私は感情のままに言葉を紡ぐ。

「今だけじゃ無いわよ、明日も明後日も、これからも、ずっと。楽しい日々は続くわ。消えたりなんて、忘れさせたりなんて。私が、シエリル・ノームがさせないわ。だから、だから…。」

勝手なこと言ってるわね。だけど…

「ありがとう」

加蓮は優しい笑顔を浮かべる。

「ごめんね、変な言い方して。大丈夫だよ、シエリル。私は頼まれたつて消えたりしないよ？だって、こんな楽しい日々が、こんな素敵な友達がいっぱいできたんだもん。」

「加蓮…」

優しく言い聞かすような加蓮。

「そ・れ・に！」

？

「私は加蓮、アイドル【北条 加蓮】なんだよ！ファンを置いていなくなる訳にはいかないよ！」

ちよっ、

「それっ！私のセリフじゃない！」

「あはは！一回言ってみたかったんだ！」

先ほどとは違う、天真爛漫な笑顔を見せる加蓮。

そんな可憐な笑顔に、私も釣られて笑い出すのだった。